

# 河川沿いの宿泊施設における日本的空間の再構築

1170137 藤原 駿

高知工科大学 システム工学群

建築・都市デザイン専攻

指導教員 重山 陽一郎

## 1. 背景と目的

現在、受け継がれてきた日本的空間を感じる事の出来る場所は限られている。景観においても様々な建築が入り交じりそういったことを意識しないことで日本的空間は失われていった。日本人として新しく進化していく街や空間の中にも日本を感じるものが必要だと考える。失われていった日本的空間を意識し、新たな日本的空間を創っていくことは不可能なのだろうか。新たな日本的空間を創るために必要なものを先人に学び、日本的空間を再構築することを目的とし、設計を提案する。

## 2. 計画

### 2.1 方針

今回進めていくにあたり、「Asia Young Designer Award 2016」という国際コンペの概要に沿って進めていく。このコンペでは 40,000 m<sup>2</sup>の日常をリノベーションすることが課題である。敷地の選定についてはコンペより自分の訪れたことのある場所で思い入れのある地域の中から選択するという条件である。

### 2.2 敷地

高知県北部に位置する本山町の帰全山を敷地とする。本山町は年間を通して涼しく、自然豊かな土地である。帰全山は野中兼山の祀られている兼山廟やキャンプ場がある県指定公園となっているが、現在はほとんど人の訪れない空間となっている。この地域は緑豊かな自然が広がっており、レジャーもたくさんあるが宿泊施設がほとんどなく魅力が伝わらないため街も人口が減るばかりと田舎ではよくある問題点を持っている。この問題点を解決しつつ、日本を感じる事の出来る、宿泊施設を提案する。



写真1 敷地写真

## 3. 日本的空間

様々な書籍を分析した結果、日本的と感じる要素として「素材」「技法」「文化」「歴史」が存在すると考察する。すべての要素が繋がった時、我々が思い描く日本的であるという感情となるだろう。時代が変わるにつれて新たな歴史が出来るため今すぐ歴史あるものを造ることは不可能である。また、新たな素材が生まれてきたことを考慮するとその変化にはついていかなければならない。そのため日本的空間を構成しているもので今後新たな空間を形成する際の意識として必要なものは「技法」「文化」だと考えこの二つについて言及する。

## 4. 取り入れた要素

### 4.1 技法

技法は主に空間配置に対して使用する。配置計画に使用することによって、日本的な景観や空間を実現することができる。全体的な配置計画の構成は①空間骨格の形成 ②空間の特質、性格 ③空間構成の技法 ④要素の作用 から成る。ここでは①と③について述べる。

### 4.1.1 布石 (①空間骨格の形成)

布石は空間の主要要素の勢力圏の絡み合いで空間の骨組を造る方法である。“その場でもっとも全体にたいし効果の大きい点を求めて石を並べてゆく”(都市デザイン研究体 1968. 日本の都市空間 P34)。これによって形成される空間は自由な形となり、動きを伴う利用に対し十分に対応しうる。

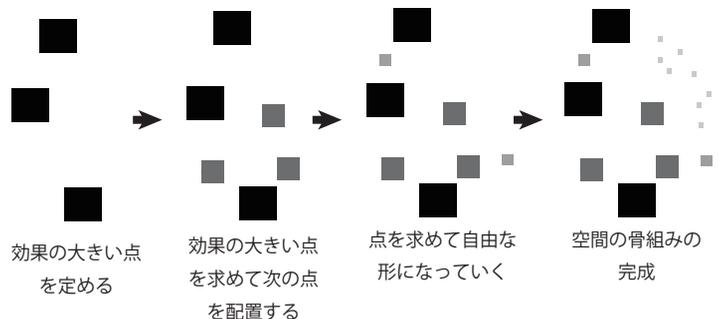
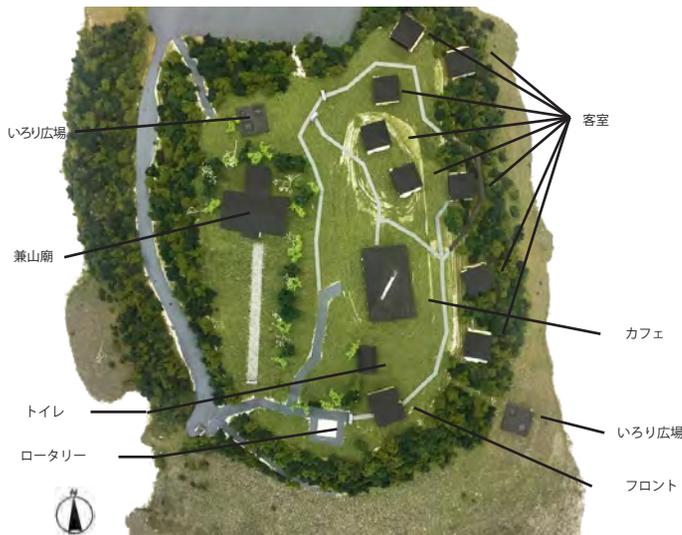
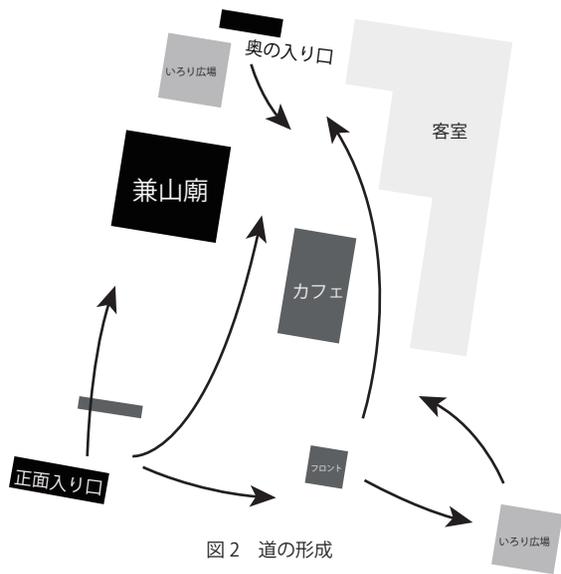


図1 ダイアグラム(布石)

正面入り口、奥の入り口、兼山廟を最も効果の大きい点として位置づける。これをつなぐ点から線を導きだし、次に効果の大きいスペースにカフェを配置する。また、廟の正面には鳥居を点として設け線を作る。ここで大まかな形が導きだされ、東側のスペースに客室を配置する。訪れた人は入り口から入り、鳥居に導かれ、兼山廟へ足を運ぶ。そして、中央にあるカフェに導かれる。宿泊者はフロントを通過することによって新たな空間へ導かれ、全体の骨格を知る。客室空間はまた異なる技法によって空間が構成されているため、さらなる日本的空間を感じる事が出来る。



#### 4.1.2 あられ (③空間構成の技法)

あられとは田舎であることを示す空間構成の技法である。“限定されない空間に要素を散布することによって、人と物のアクティビティを引き起こしある一定の秩序を生み出す。景(美)としてはコントラストの美を狙い、用(機能)としては様々な形式の人と同時に起こるいくつかの流れに対応することを目指している”(都市デザイン研究 1968. 日本の都市空間 P48)。実例で存在するのは「白川・出雲の集落」である。



あられを意識的なデザインとして取り上げることで本山町の土地にあった田舎らしさを表現する。また、布石によって生まれたオープンスペースに整然と配置することで統一された空間を創り出す。宿泊に訪れた人々やこの地に訪れた人々などが起こす流れによってコミュニケーションの渦が起き、にぎやかな空間となる。敷地の東側にある川の対岸からは客室の並びをかすかに感じる事ができ、緑と客室のコントラストからなる美で興味を引く。客室は縁側のある解放面を東方向に向けることで川を感じることが出来る。また、3面ガラス張りになっているが、あられ状に並べ、高低差をつけることでプライバシーを考慮している。

2/4

## 4.2 文化

文化の要素は主に建築物の様式、表現に取り入れる。こうすることで、日本の文化を肌で感じることが出来る。以下のキーワードを意識して設計することによって、日本的空間を表現する。

### 4.2.1 奥性

奥とは日本独特の空間概念である。“水平性を強調し、見えざる深さにその協調性を求める。”（槇文彦 1980. 見えがくれする都市 P219）奥性は到達点としてクライマックスがない場合が多く、たどり着くまでのプロセスにドラマと儀式性がある。



写真6 見えざる奥

進む先が見えなくなることで好奇心をそそる。植物や建物で道が見え隠れすることによって探究心をそそり、その先へ導く。



写真7 門の奥

門を構えることで水平的な深さを演出する。また、奥にあるものの特別感が生まれ、奥の空間に興味を持たせる。

### 4.2.2 壁の認識

軸組文化である日本は壁面を絶対的なものとして捉えないという西欧諸国とは違う壁の認識の仕方をする。この認識が日本の建築空間の造り方に表出ており、「床の文化」が誕生した。また壁の認識の違いから建築が道に対し開いた空間を持ち、生活が道に溢れた。それにより「間」が所々に生まれた。

「床」と「間」をキーワードとして意識し、客室とカフェを設計した。

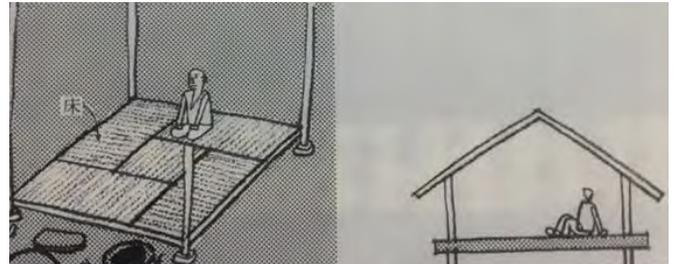


写真8 床の文化（芦原義信 1983. 続・街並の美学 P5）

#### (1)客室

床でくつろぐことで普段の視線とはまた異なる世界を楽しむことが出来る。形は3面ガラス張りとなっており、座ることで暖簾から垣間見える外部を感じる日本ならではの空間を表現する。縁側は外部に開けた「間」であり、外部を楽しむことが出来る。

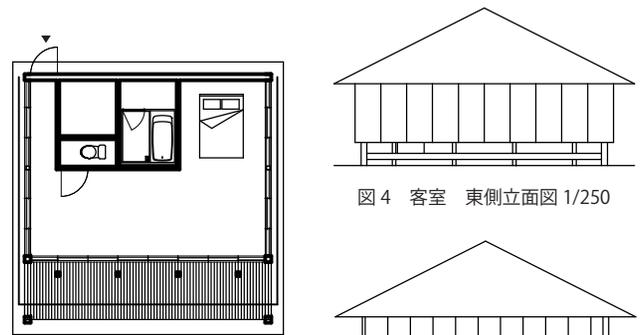


図3 客室 平面図 1/250

図4 客室 東側立面図 1/250

図5 客室 南側立面図 1/250



写真9 客室

## (2)路地カフェ

床の文化を意識し席は座敷としている。内部に壁は存在せず、通路で区切ることによって生まれた「間」が点在する。道に開けた「間」によって賑わいが生まれる。これにより日本の空間としての路地を感じさせ、内部と外部の曖昧な空間となる。全面がガラスの開口部になっており、四方から出入り可能である。

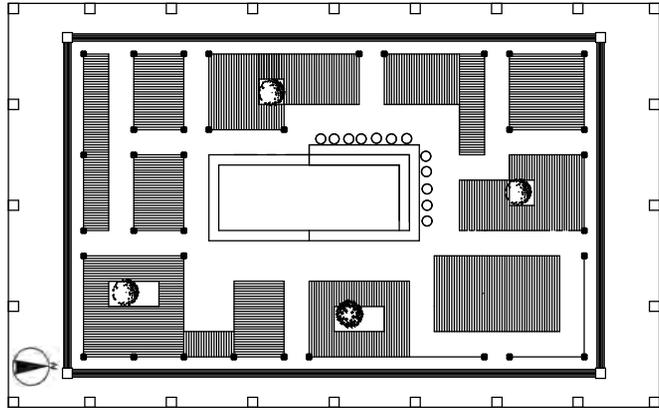


図6 カフェ 平面図 1/300



図7 カフェ 西側立面図 1/300



写真10 カフェ

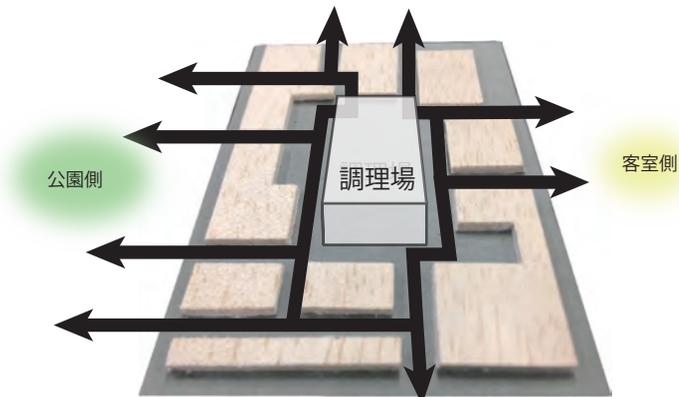


図8 路地と間

## 4.2.3 境界

日本は壁が絶対的ではなかったため境界が曖昧であり、ソフトである。内外を完全にしきるものでなく、“内と外とが混在化し、不明確になっている”。(槇文彦 1980. 見えがくれする都市 P45) 建築は縁側や庇などによって内外の環境の重合性を共有してきた。



写真11 境界 (のれん)

客室は3面ガラス張りであるが、暖簾によりプライバシーを確保することが出来る。また、暖簾により内部と外部の境界を曖昧にすることで内部にいながら外部を感じることが出来る。風によって暖簾が揺れ、外部が垣間見える様は日本的な眺めである。



写真12 カフェと外の境界

境界が見えないことで内部の賑わいが見える。雰囲気がかかりやすく、人を中に導く。内部の人は外部にある自然を感じながら楽しむことが出来る。